みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Cult Groups in Kerama Islands : Notes on Folk Religion in Okinawa (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 幹治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004609

慶良間群島の祭団連合

——沖縄の民俗宗教ノート(1)——

伊　藤　幹　治*

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．男女神役の地位と役割
Ⅲ．播種儀礼と加入礼
Ⅳ．折目と御願
Ⅴ．男女神役の継承とその社会的基礎
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

戦後，沖縄の社会人類学は飛躍的な発展をとげた。この10年ばかりのあいだに，すぐれた調査報告や作業仮説がいくつか公にされている。広義の人類学的な沖縄研究の主導権が，柳田国男や折口信夫を先駆者とした民俗学から社会人類学へ徐々に移りつつあるといってよいだろう。

こうして社会人類学的な研究が活発になるにつれて，親族組織や世界観の問題が集中的に取りあげられるようになった。そして，沖縄研究は，この二つの問題を軸にして急速に進展した。いずれも，沖縄の伝統的な社会=文化を理解するうえで重要な問題であるが，このほかにも取りあげてみなければならない問題がいくつかある。御嶽（ウタキ）と呼ばれる聖なる杜をめぐって形成された祭団の構造とか，女性神役を中心とする祭祀=信仰体系の問題などが，そのひとつである。どれも資料の蓄積が十分でないという事情もあって，これまで積極的に検討されていない。

筆者がはじめて沖縄を訪れたのは，1959年の10月のことである。当時は，戦後の沖縄研究がやっと端緒についたばかりであった。筆者は，翌年の9月末まで，1カ年ほど沖縄本島に滞在し，主として沖縄本島の周辺の島々を訪れて，御嶽崇拝や祭祀組織，農耕儀礼などを中心とした民俗宗教に関する基礎資料の採録につとめた。慶良間群島の阿嘉島・慶留間島，沖縄本島北部の古宇利島，伊是名島などの離島が，筆者の主要な調査地であった。採録資料の一部はすでに報告したが [伊藤 1962: 7–12, 1974a: 155–182, 1974b]，そのほとんどは未発表のまま今日に至っている。

調査をおこなった時から，すでに15年以上の歳月が経過している。その間，沖縄の

* 国立民族学博物館第3研究部

社会は産業化や都市化の波にあらわれて急激な変化をとげている［松原 1972: 175–197; Итон 1974: 51–57］。筆者が訪れた離島の生活も，おそらく例外ではないだろう。こうした状況を十分に知りながら，ここにひと昔以上もまえに採録した資料を報告するのは，ほかでもない。沖縄の民俗宗教に関する資料の蓄積とその検討が，これまでかならずしも十分におこなわれていないということが，そのひとつの理由である。いまひとつは，将来，沖縄の宗教変動の問題を検討するうえで，ここに報告する事例も，ひとつの素材になると考えるからである。

本稿は，副題が示しているように，沖縄の民俗宗教を主題とした調査報告である。この報告にひきつづいて，当時，沖縄の離島で採録した資料を逐次，本誌に発表する予定である。

慶良間群島は沖縄本島の南西海上に位置し，前慶良間（メー・キラマ）と後慶良間

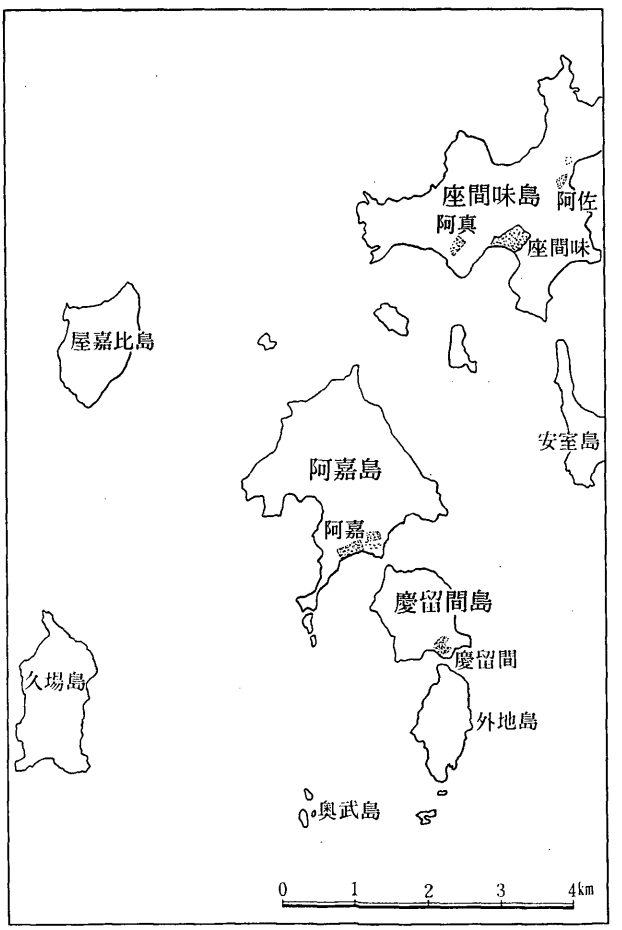

図1　後慶良間（クシ・キラマ）の島々

（クシ・キラマ）からなる。前慶良間は渡嘉敷島と前島，後慶良間は座間味島と阿嘉島，慶留間島などからなっている。後慶良間の島々は，行政的には座間味村に属していて，座間味島の座間味が行政上のセンターになっている。ここに取りあげる阿嘉島は周囲9.81キロメートル，慶留間島は周囲5.89キロメートルの小島で，調査時の1960年3月現在，阿嘉島は戸数114，人口703，慶留間島は戸数37，人口193，いずれも鰹漁を中心とした漁業と農業を生業とした村である。

Ⅱ．男女神役の地位と役割

阿嘉島と慶留間島の祭団は，それぞれ独立した単位ではない。相互に連結してひとつの祭団を編成し，祭団連合という形態をとっている。したがって，祭団によっておこなわれる行事も，こうした編成のあり方を反映して，いくらか複雑になっている。

興味深いと思うのは，祭団連合という現象が，両島の住民の歴史的な親縁関係と深くかかわっていることである。阿嘉島と慶留間島には，二つの島の創成過程を物語る伝承がいくつかある。

ある伝承によると，むかし，阿嘉島と慶留島は無人島であった。そこで座間味島の座間味村に住む阿真大比屋の子孫の 冨里大比屋と 上地大比屋， 下之大比屋， 同島の阿真村に住む神麻大比屋の子孫の慶留間島大比屋たちが協力して，阿嘉島と慶留間島に村をつくった。現在，両島に祀られている御嶽の上殿と下殿は，それぞれの村を創始した先祖が住んでいたところ，といわれている。この伝承では，だれが始祖なのかはっきりしないが，別の伝承によると，阿嘉島の始祖は冨里大比屋，慶留間島の始祖は慶留間大比屋になっている。

二つの伝承では，阿嘉島と慶留間島の始祖が，それぞれ座間味島の座間味村と阿真村から出たということになっているが，つぎのもうひとつの伝承は，阿嘉島を本村，慶留間島を分村とする島の人びとの考えを反映している点で興味をひく。それによると，阿嘉島を創始した冨里大比屋の孫にあたる上地大比屋に，二人の男子と二人の女子がいた。長男は阿嘉大比屋といって，父のあとをつぎ，その子孫が阿嘉島の女性神役とこれを補佐する男性神役になった。次男は上地仁屋といい，慶留間島の家系をつぎ，その子孫が慶留間島の女性神役と男性神役になった。また，長女は真嘉春金といって祝女（女性神役の頭目）に，次女の思加那志金は巫女（ユタ）になった，というのである。

この伝承によると，阿嘉島と慶留間島の男女神役を出している家筋の原点が，阿嘉島出自の上地大比屋ということになる。その歴史的な真偽は別として，両島の男女神役の原祖が，阿嘉島の上地大比屋の二人の兄弟だという点は注目に価する。このことが，両島の祭団編成のあり方を示唆しているように思われるからである。

両島の祭団は，根神（ニー・ガン）と呼ばれる6人の女性神役とこれを補佐する男性神役の根人（ニー・ッチュ）を中心に，ウクディ，サンナンシー，パーパー・ター，一般の人びとによって編成されている。根神と根人の数は以前から一定しているが，阿嘉島と慶留間島とではその数が異なっている。阿嘉島には根神が5人，根人が3人いるが，慶留間島では根神が1人，根人が2人しかいない。根神の数が阿嘉島に集中しているのは，阿嘉島が本村，慶留間島が分村ということと，あるいは関連しているのかもしれない。以下，男女神役の地位と役割をのべてみることにしよう。

根神はそれぞれ称号をもっている。阿嘉島の根神は，祝女（ヌル），ムシジキ，ウシチャキ，エーチャシャと呼ばれ，慶留間島の根神は，ミークムと呼ばれている。慶留間島にはかつてアキヌギレーという根神がいて，両島の根神は「ナナ・ヌ・ニーガン」（7人の根神）と総称されていたというから，7人が根神の基本的な編成単位であったらしい。アキヌギレーの継承がたえてしまったために，慶留間島の根神はミークムだけになっているわけだ。

両島の根神に共通している点は，どの根神も，特定の家筋から選出・継承されていて，ミチャン御棚と呼ばれる神棚を祀っていることである。なかでも阿嘉島の祝女は，根神のなかの最高権威者で，琉球王朝のころは，祝女地（ヌル・ジー）と呼ばれる土地（畑）を拝領していたということだ。1930年ごろまでは，稲や麦の収穫が終わると，祝女ジカといって，稲と麦を1合ずつ祝女に醵出することが，島の人びとの義務になっていたという。一般の女性のなかから選ばれるサンナンシーも，農繁期になると，祝女の婚家に出かけて，田畑の手伝いをすることを義務づけられていたということだ。どれも旧慣にすぎないけれども，祭祀上の主導権をもっている点は，いまもむかしもほとんど変わっていない。

男性神役の根人は，祭祀に参加して，根神に白酒を注いだり，御嶽を管理することを主な役割としている。また，根神と同じように，根人の継承も，特定の家筋の男性にかぎられている。

ウクディは，根神を補佐する女性神役のことで，ウクリともウクリ・カミンチュとも呼ばれている。根神と同じような機能をもっているが，異なっている点もいくつかある。根神が阿嘉島と慶留間島にまたがる祭団連合レヴェルの女性神役であるのに対して，ウクディはそれぞれの島の祭団に帰属している女性神役であることが，そのひとつである。二つの島では，毎年，折目（ウイミ）と呼ばれる祭祀が定期的におこなわれているが，5月御祭と6月御祭，シワサシ（悪霊駆除）という3度の折目にかぎって，阿嘉島の根神が慶留間島を訪れて合同祭祀をおこなっている。この合同祭祀に参加するのは，慶留間島ではミークムだけにかぎられていて，ウクディはこれに参加する資格をもたない。根神が本神（ホンガミ）と呼ばれているのに対して，ウクディが脇神（ワチガミ）と呼ばれているのは，こうした参加資格の問題と関連していると

みてよいだろう。

いまひとつは，根神が特定の家筋の女性によって継承されているのに対して，ウクディが根神以外の一般の女性から選出され，家筋が特定化されていないということだ。しかも，根神のばあいとちがって，ウクディの数は，かならずしも一定していない。調査時のウクディは，阿嘉島では5人，慶留間島では3人だが，両島のウクディは，戦前，かなりの人数に及んでいたということである。また，どのウクディも神がかりになったり，病気の治療をしてもらった巫女（ユタ）にすすめられたりして，ウクディという地位についていることも，根神とのちがいを示す指標になっている。

サンナンシーは男女神役につかえる女性下役のことで，折目ごとに各戸から米をあつめて白酒をつくったり，供え物の準備をしたりするほか，根神のお伴をするのが主な役目になっている。任期は1カ年で，2月から8月にかけておこなわれる折目に参加し，男女神役のもとではたらくことが義務づけられている。

Ⅲ．播種儀礼と加入礼

阿嘉島と慶留間島の播種儀礼は，稲種の成育を祈願する宮種（ミヤダニ）と海の彼方から訪れる来訪神ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシを迎える種取り（タントゥイ），ジフニ祝からなる。

種取りについては，これまで小牧実繁 [1931: 178–179] や知念勉之助 [1934: 509–510]，河村只雄 [1942: 209–212] などによって報告されているが，この行事が外来者を排除して，秘密裡におこなわれていたという事情もあって，どの報告も，その全貌をとらえつくしてはいない。その一部をのべているにすぎない。筆者が訪れたときは，種取りとジフニ祝の行事はたえてしまい，宮種行事だけがおこなわれていた。河村の報告が公けにされた1942年ごろ，種取りとジフニ祝の行事が廃止されたと伝えられているが，その理由ははっきりしない。つぎに紹介する播種儀礼の実態は，筆者が聴き書によって採録した資料にもとづいて再現したものである。

播種儀礼は旧暦9月におこなわれる。まずはじめに，稲種の成育を祈願する宮種が，阿嘉島と慶留間島の根神によって，阿嘉島の聖なる杜グシクでおこなわれる。この日，両島の家々では稲の種つけをおこなうことになっているが，グシクでは，パーパー・ター（おばあさん連中）と呼ばれる女性集団への加入礼と，種取りの日に村の警備にあたるヤジクの選定がおこなわれる。ヤジクはマームン神とも呼ばれ，サンナンシーをすませたパーパー・ターのなかから数人選ばれる。その頭目をヤジク頭といい，阿嘉島と慶留間島からひとりずつ選出されている。なお，両島出身者以外の女性は，ヤジクになることがむずかしかったということである。

宮種から7日目に種取り行事がおこなわれる。この日，家々では苗代田で種まきを

するきまりになっている。種蒔きがすむと，両島の家々では，ンビンといって，糯米をたいて，これをたいらにして長方形に切った餅をつくり，先祖に供えると同時に，その一部を根神のところに持参する。

この種取りは，播種儀礼のなかの最大の行事で，この日，両島の根神は，阿嘉島の祝女の宗家である祝女殿内（ヌン・ドゥンチ）に集まる。祝女殿内には，それぞれの根神の宗家に祀られている香炉が運ばれていて，ここで稲の豊作を祈願して，神歌（ウムイ）が唱えられる。これが終わると，根神はハナ・グサン（花杖）といって，木の枝に造花を飾りつけ，これを竹に挿した杖をもって，祝女を先頭に行列をつくり，集落の東のはずれにあるムイグゥ（小さな杜）に出かけて，海の彼方から訪れるヤヘー・ヌ・ミチャンガナシを迎える。ムイグゥは阿嘉島の聖地のひとつで，一般の人びとは普段，ここに足をふみ入れることを禁じられている。根神のうち，祝女とムシジキ，ウシチャキの3人は，ムイグゥに上ったり下ったりする。この動作を3度くり返してから，ハナ・グサンを振って，海の彼方にむかい7回遙拝する。こうしてヤヘー・ヌ・ミチャンガナシを迎えるわけだが，その間，一般の人びとはムイグゥの下の方で，ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシの来訪を待っている。

ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシのお迎えがすむと，根神は再び行列をつくって，御殿（ウルン）と呼ばれる仮設された萱ぶきの小屋に出かける。そして，しばらくしてから御殿の附近で馬の鈴の音がきこえてくると，両島のヤジクが小太鼓をたたきながら，「パイ・パイ，ハイ・ハイ」と叫んで，村のなかをかけめぐって警戒にあたる。

翌日の夕方，慶留間島で種取り行事がおこなわれる。両島の根神は，トゥンチ・グゥ（小さな殿）と呼ばれる祭場で，稲の豊作を祈願してから浜へ出かけ，来訪神クボー・ヌ・ミチャンガナシ（久場島の神）を迎える。この来訪神は男神で，隣接する久場島（クボー）から馬に乗って訪れると信じられ，出現する際，慶留間島と久場島のあいだに，黄金の橋がかかったと伝えられている。

ジフニ祝は，種取り行事の翌日におこなわれたとか，7日後におこなわれたともいわれていて，日取りがはっきりしないが，両島の来訪神をお送りする行事だと伝えられている。

以上が，阿嘉島と慶留間島でおこなわれていた播種儀礼の概要であるが，着目したいことがいくつかある。

宮種の日に，パーパー・ターと呼ばれるおばあさん連中に加入するための資格審査の儀式がおこなわれていたことが，そのひとつである。両島の親族呼称によると，祖母とその世代の女性（祖父母の姉妹）はパーパーと呼ばれ，また，ターは複数をあらわす接尾語を意味しているから，パーパー・ターは，孫のある女性一般を意味しているといってよい。

このパーパー・ターに加入するための儀式は，聖なる杜グシクでおこなわれるわけ

だが，その際，クジという方式が採用される。なお，素行の悪い女性は，あらかじめ候補者のなかから除かれている。この日，グシクで稲種の成育祈願がすむと，両島の根神を代表して，祝女が盆の上に生米を盛り，これをグシクの神に供えてから，生米をすこしつまむ。この動作を数回くり返す。そして，生米の数が奇数ならばパーパー・ターに加入することが認められ，偶数しか出ないと加入が認められない。

パーパー・ターに加入してはじめて，女性は一人前とみなされ，以後，グシクに昇ることが公認される。そして，サンナンシーになって折目に参加する資格を獲得する。ところで，慶留間島では パーパー・ターの絶対数が不足しているので，サンナンシーを1カ年つとめてから，パーパー・ターに加入するという変則的な形態をとっている。この加入礼は，種取り行事が廃止されてからも，ひきつづいておこなわれている。

いまひとつ注目したいのは，種取りの日に，ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシとかクボー・ヌ・ミチャンガナシと呼ばれる来訪神が，海の彼方から訪れると信じられていたことである。

沖縄の島々には，来訪神の観念がひろく認められる。沖縄本島の北部東海岸の安波では，旧暦7月におこなわれる海神祭（ウンジャミ）のときに，海の彼方からニレーの神が訪れてくると信じられている [宮城 1954: 120–121]。八重山の石垣島北端の川平では，稲の植えつけ期になると，ニラ・ン・タ・ウフヤンと呼ばれる来訪神が，海の彼方もしくは地下にあるといわれる聖なる国ニロースクから訪れてきて，稲の収穫後まで川平に滞在し，再びニロースクへ戻られると信じられている。また，旧暦7月から8月にかけておこなわれる節祭り（シツ）には，マユン・ガナスという仮装=仮面の来訪神が出現し，家々を訪れて人びとに祝福を与える行事がおこなわれている [酒井 1956: 80–82; 比嘉 1969: 33–37]。

同じ八重山の石垣島の宮良や小浜島，西表島の古見でも，旧暦6月におこなわれる豊年祭（プール）に，ニール・ピトゥ（ニールから訪れる人）とかニロー神と呼ばれる仮面=仮装の来訪神が出現し，家々を訪れて人びとを祝福する行事がおこなわれている [宮良(賢) 1940: 60–64; 宮本 1952: 7–11; 折口1955: 26–27; 源 1957: 79–82; 宮良(高) 1962: 349–352, 1968: 92–98; 柳田 1963: 287–289; 大阪市立大学八重山群島学術調査隊編 1963: 161; 真野 1967: 42–51]。

ひとくちに来訪神といっても，出現する時期や様態はかならずしも一様でない。ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシが播種の折に訪れてくるのに対して，ニラ・ン・タ・ウフヤンは田植のころ，ニレーの神やニール・ピトゥは収穫後に出現する。ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシとニレーの神が海の彼方から訪れると信じられているのに対して，ニラ・ン・タ・ウフヤンは海の彼方もしくは地下の遠いところから来訪すると伝えられている [比嘉 1969: 37]。ニール・ピトゥは地下の道から出現すると伝えられているが，その道は島を見おろすピラミッド型の小山の頂上に達するという [馬淵 1971:

377]。また，ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシやニレーの神が霊的存在と考えられているのに対して，ニール・ピトゥは仮面をかぶり，仮装をした若者たちである。その意味で，ヤヘー・ヌ・ミチャンガナシは来訪霊と呼ぶほうが適当なのかもしれない。

こうしたヴァリエーションについては，将来，改めて検討しなければならないが，どの来訪神慣行も，共通して秘儀性がつよいということを，この際，指摘しておこう。

最後に，播種が単なる生産行為ではなく，儀礼的な意味づけをともなっていたという点について触れておきたい。宮種の日に種おろしがおこなわれ，種取りの日に種蒔きをするきまりになっていたということは，生産行為と儀礼行為とが密接にむすびついていたことを示していると考えてよいだろう。また，種取り行事の廃止後，種蒔きの日取りが，人びとの自由な判断にまかされるようになっているが，稲の刈り上げがすむと，家々では種取りの日の食物だったンビンをこしらえ，これを先祖に供えているのも，儀礼要素の置換と持続の問題を考えるうえで興味深い。

Ⅳ．折目と御願

阿嘉島と慶留間島の儀礼は，折目（ウイミ）と御願（ウガン）の二つからなる。折目は御祭（ウマチー）とも呼ばれ，阿嘉島ではトゥヌ，慶留間島ではトゥンチ・グゥ（小さな殿）といわれる祭場でおこなわれる。いずれの祭場も，上の殿と下の殿という二つの社からなっている。

両島の折目は，２月御祭（麦の初穂祭）と５月御祭（稲の初穂祭），６月御祭（稲

写真１　２月御祭（麦の初穂祭）

の収穫祭)，シワサシ（悪霊駆除の祭り）などで，農耕儀礼が主体になっている。折目の様式はいたって単純で，根神を中心とする男女神役が，上の殿と下の殿で神歌（ウムイ）を唱え，農作物の豊饒と人びとの無事息災を祈願するだけである。なお，初穂祭の2月御祭と5月御祭には，とくに麦と稲の穂が3本ずつ供えられる。また，5月御祭と6月御祭，シワサシには，阿嘉島の根神とウクディが，阿嘉島での祈願をすましてから慶留間島を訪れ，慶留間島の男女神役と共同祈願をおこなっている。

両島の儀礼のなかで興味をひくのは，根神とウクディが，折目のほかに，いろいろな行事をおこなっていることである。御願と呼ばれている慣行がそれで，大漁を祈願する海御願（ウミ・ウガン）や，人びとの無事息災を祈願する井戸御願（カー・ウガン）など，さまざまな御願がおこなわれている。以下，慶留間島の事例を手がかりにして，御願の実態を紹介してみよう（月日は旧暦による)。

海御願は，御願のなかでも最大の行事で，毎年，8月15日におこなわれる。聖地イビ・ヌ・メーに魚が供えられ，根神とウクディによって大漁と海上安全が祈願される。なお，3月から10月にかけての鰹漁期には，毎月7日に，根神とウクディがイビ・ヌ・メーで大漁祈願をおこなっている。

井戸御願は元旦の行事で，根神と根人，ウクディは，トゥンチ・グゥで祈願をすましてから，チュン・ガーとかフチャー，ミー・ガーと呼ばれる由緒ある井戸へ出かけ，そこに生米を供えて，島の人びとの無事息災を祈願する。この御願は，初御願（ハチ・ウガン）ともシマ・ウガンとも呼ばれている。また，毎年，春の清明祭の折に，慶留間島の根神は，阿嘉島の根神といっしょに，無人島の久場島（クボー）と外地島（フカジ）に出かけ，そこに葬られている先祖の供養をおこなっている。

以上の御願は，いずれも定期的におこなわれている慣行であるが，不定期的におこなわれているものが，いくつかある。家の棟上げの際におこなわれるヤー・マンネーと呼ばれる御願が，そのひとつである。この御願には，根神かウクディがひとり招かれる。そして，手にススキをもって神歌を唱えながら，家の内側を7度まわって，きよめの所作をくり返す。舟ができあがったときにおこなわれるフニ・マンネーのばあいにも，ヤー・マンネーと同じような所作がおこなわれる。また，星の御願（フシ・ヌ・ウガン）といって，運勢の悪い人が，根神かウクディを招いて祈願してもらうこともある。

なかでも興味をひくのは，根神やウクディが，沖縄本島などで巫女（ユタ）がおこなっている呪術的な行事にも関与していることである。沖縄本島とその周辺の島々に住む人びとのあいだに，一種の遊離魂の観念がある。マブイと呼ばれる霊魂がそれで，この霊魂は胸部に宿っていて，急におどろいたり，クシャミをしたり，恐怖にかられたりすると，身体からはなれていくと考えられている。マブイ・グミと呼ばれるユタの行事は，こうした遊離魂を身体にもどすための呪術である［リーブラ 1974: 30–31］。

慶留間島の人びとは，マブイをマブヤ，マブイ・クミをマブヤー・グミと呼んでいる。一般にマブヤーは墓に行くと信じられているが，子供のマブヤーは便所（フル）に行くといわれ，子供が急におどろいたりすると，親はその子供が着ていた衣服をもって便所へ出かけ，その衣服で子供のマブヤーを包んでくるという。ちなみに，便所には子供のマブヤーをあずかる神様がおられて，この神様は屋敷内に祀られる神々のうちで，もっとも位が高いといわれている。

根神やウクディが，こうした行事に参与しているからといって，巫女（ユタ）と同じような呪法をおこなっているわけではない。御願のばあいと同じように，祈願という行為が軸になっている。たとえば，人が海上で急におどろいたり，恐怖にかられたりすると，海マブヤーといって，根神かウクディにマブヤー・グミをしてもらうが，その際，聖地イビ・ヌ・メーで祈願がおこなわれるだけである。

なお，根神やウクディと並んで，パーパー・ターに加入した女性も，子供の初誕生や生年祝（トゥシビー）などの通過儀礼の折に，家々を訪れて，人びとの無事息災を祈願するという役割をもっていることも，この際，指摘しておこう。

V．男女神役の継承とその社会的基礎

阿嘉島と慶留間島の根神と根人は，すでに指摘したように，一定の家筋が選出・継承の母胎になっている。一定の家筋というのは，「門中」と呼ばれる父系出自集団の宗家のことで，阿嘉島の祝女は，祝女殿内（ヌン・ドゥンチ）という「門中」の宗家に生まれた女性によって継承されている [伊藤 1974b: 187–188]。ここでは，慶留間島の事例を手がかりにして，男女神役の継承の問題を検討してみよう。

慶留間島の根神ミークムは，父の母 (m_1) と息子の娘 (m_2) のあいだで継承されている。m_1 の先代ははっきりしないが，m_1 はウフヤ (U) の娘，m_2 はミーヤ (M) の娘で，ミーヤはウフヤの分かれだと伝えられている。また，根人のひとりも，ウフヤを相続した男性 (u_1〜u_4) によって代々継承されている。こうした継承過程をめぐって，まず注目したいのは，ウフヤもミーヤも，慶留間島の草分けの家だということである。

慶留間島には草分けの家が5軒ある。ウフヤとミーヤ，アガイ，クシ，スン・ドゥンチ（いずれも屋号）がそれで，それぞれの家は根所（ニー・ルクル）とかムトゥ・ルクル，ムートゥ・ヤーと呼ばれ，その屋敷のなかに，それぞれの始祖を祀った祠がある。この島の慣行のひとつに，毎年，島の人びとが元旦に5軒の家々を訪れるということがあるが，なかでも，ウフヤは草分けの家々の中心的な存在で，その際，人びとが最初にウフヤを訪れるきまりになっている。また，かつて盆の15日の晩，若者たちが念仏を唱えながら，各戸を訪れていたころ，はじめに訪問したのが，このウフヤ

であったと伝えられている。

この島には，こうした草分けの家が中心になって，「門中」と呼ばれる父系出自集団が形成されているわけだが，ひとくちに「門中」といっても，その構造はかならずしも一様ではない。ミーヤを中心とした「門中」のように，宗家筋と分家筋の系譜上の本末関係がはっきりしたものもあれば，ウフヤやアガイ，クシを中心とした「門中」のように，宗家筋と分家筋の系譜関係が不明確なものもある。また，スン・ドゥンチのように，宗家だけで分家をもたないものもある。共通しているのは，それぞれの宗家の屋敷に，「門中」の宗教的シンボルとしての始祖が祀られていることだが，ミーヤの分家筋（3戸）が，いずれもミーヤの当主の曽祖父と祖父の代に分立していて，この「門中」の成立があたらしいことを考えると，慶留間島の「門中」は，一般に宗家筋もしくは根幹の血筋だけがはっきりした stem lineage とみてよいだろう。

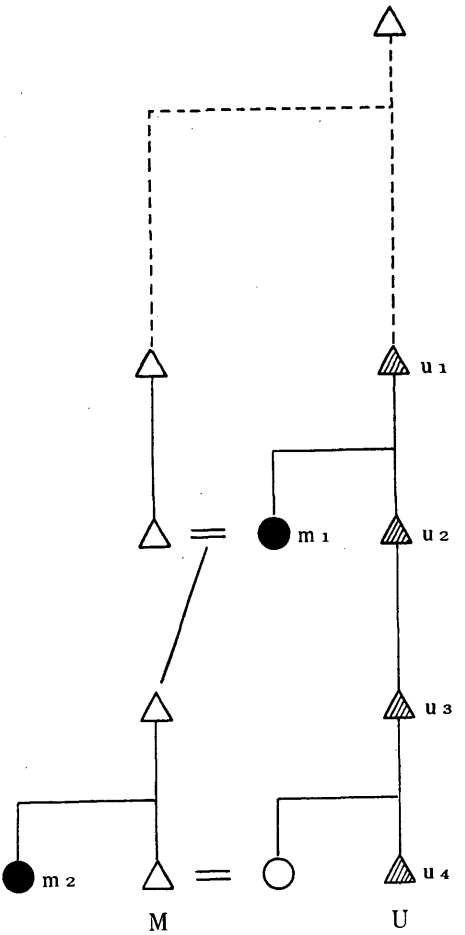

図2　男女神役の継承過程

ところで，いまひとつ注目したいのは，草分けの家々のあいだにも，本末の系譜関係がたどられていて，この島の「門中」が二つの系統に収斂され，そのシンボルとして，海岸の洞穴を利用した共同墓が設けられていることである。島の人びとによると，ミーヤはウフヤの分家筋，クシとスン・ドゥンチはアガイの分家筋と考えられていて，「門中」はウフヤとアガイの二つの系統に再編成されている。一種の「門中」連合で，ウフヤ系統がウフ・ルクル（大所），アガイ系統がウフ・ガーラと呼ばれる共同墓を所有している。そして，毎年，清明祭の折に，二つの系統に帰属している人びとは，それぞれの墓を訪れて，先祖の供養をおこなっている。なお，この共同墓も漸次，解体化しつつあって，二つの系統に帰属していながら，ウフ・ルクルやウフ・ガーラとは別に，あらたに家墓を設けた家が8戸認められる。

根神と根人の継承は，こうした草分けの家を中心とした「門中」や「門中」連合が

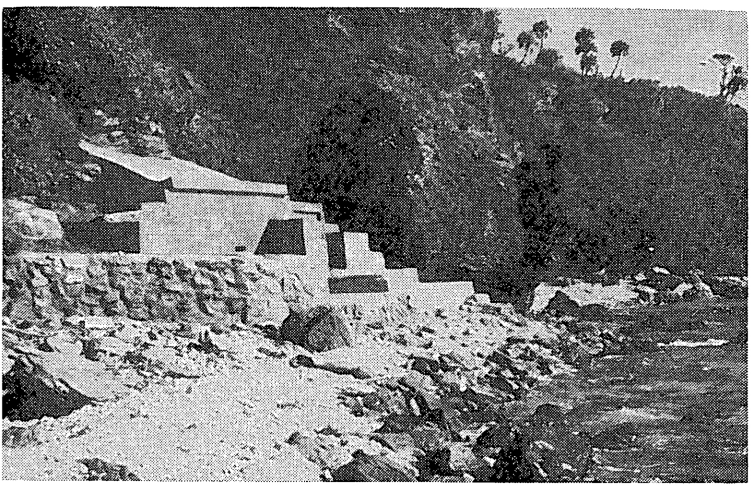

写真2　共同墓のウフ・ルクルとウフ・ガーラ

母胎になっている。根神がウフヤ (U) の娘 (m_1) からミーヤ (M) の娘 (m_2) に継承されているのは，ミーヤがウフヤの分かれであり，双方が同一の始祖の血筋をひいているという考えにもとづいている。また，根神 (m_2) の加入礼が，総宗家筋のウフヤでおこなわれたという事実は，ウフヤがミーヤのムトゥ・ドゥクルだという認識がつよくはたらいているからであろう。このことと並行して，二つの宗家のあいだに，婚入と婚出がくり返されているのは，婚姻をとおして，相互の連繋を強化しているとみてよいだろう。

なお，根人のひとりが，ウフヤ系統の総宗家にあたるウフヤから代々継承されていることは，すでに指摘しておいたが，もうひとりの根人が，アガイ系統の総宗家のアガイから代々継承されている。二人の根人は，「門中」連合ともいうべき二つの系統の総宗家の相続者に課せられているわけである。

Ⅵ. お　わ　り　に

以上，男女神役の問題に焦点をすえて，阿嘉島と慶留間島の祭団についてのべてきたが，両島の祭団は，それぞれ独立した単位ではない。祭団連合という形態をとっている。この種の祭団は沖縄本島にも認められるが，ところによっては，ひとつの村落がひとつの祭団を形成しているところもある。いずれの型も，沖縄の村落共同体の形成過程の問題と深くかかわっているわけだが，この点については将来，改めて検討する必要があるだろう。ここでは，両島の祭団のなかのパーパー・ターについて，ひとことのべておこう。

改めて言うまでもないことだが，沖縄本島では，祝女とか根神と呼ばれる女性神役が祭団の中核になっている。阿嘉島と慶留間島のばあいも例外ではない。阿嘉島の祝女を中心とした根神が，祭団のなかで中核的な位置を占めている。ところで，おばあさん連中のパーパー・ターは，沖縄本島などであまり見られないという点で，たいへんユニークな制度といってよい。

両島では，女性が一人前と認められるのは，パーパー・ターに加入してからだといわれている。したがって，パーパー・ターの資格審査がおこなわれるグシク・ヌブイ（グシク昇り）は，一人前の女性になるための通過儀礼といってよい。こうして一般の女性は，折目に参加したり，御願をおこなったりする機会をもつわけだが，このパーパー・ター制度は，両島の祭団が存続するうえで，重要な役割をはたしている点で注目に価する。

祭団編成の問題と並行して，「門中」の構造について触れておきたいことが，ひとつある。調査時の慶留間島の世帯のなかに，4組の養子縁組が確認された。そのうちのひと組は，父の兄弟の息子（次男）を養子とし，あとの3組は　父の父の兄弟の息子（次男以下）を養子としたもので，いずれも同じ「門中」の男子が養子としてむかえられている。そこには，男系血縁が養子の選択原理になっているわけだが，以前の養取慣行には，こうした選択原理が，それほどつよくなかったらしい。というのは，他の「門中」出身者が養子にむかえられ，養家の「門中」の成員として認められたという事実が見られるからである。

たとえば，慶留間島の草分けの家であるアガイの先々代の根人 (u_2) は，子供のころ，沖縄本島の首里の他の「門中」から聟養子としてむかえられ，宗家アガイを相続している。また，同じ草分けの家のミーヤとスン・ドゥンチの先祖のなかにも，首里系の他の「門中」出身者が養子としてむかえられ，それぞれの宗家をついだ人がいると伝えられている。「アガイ門中」の分家筋のなかにも，他の「門中」出身の養子がいたという伝承もある。かつての養取慣行では，男系血縁の貫徹ということよりも，むしろ家筋の存続という点が重視されていたようだ。

興味深いのは，慶良間群島の北西海上にある渡名喜島や粟国島，後慶良間の行政上の中心になっている座間味島の座間味にも，こうした事実が観察されることである。渡名喜島には，養子に関する男系血縁上の規制が存在しないために，聖地トゥン(殿)に帰属する「ヒキ」集団の内部構造が安定性を欠いているという [山路 1967: 24–28, 32–33]。粟国島の「門中」には，男系血縁をつらぬく傾向が認められるが，かつて養子とか聟養子をむかえるにあたって，男系血縁上の規制がなかったことを考えると，この島には，男系血縁を貫徹する「門中」と非男系血縁をも含む「門中」とが並存しているらしい [山路 1968: 17–31]。

また，座間味島の座間味では，1940年ごろまで，他の「門中」出身者も養家の正当

な成員として認められていたが，その後，同一の「門中」のものを養子とする傾向が徐々につよまってきて，男系血縁の存在が確認されたものだけが，養家の正当な成員とする考えが定着し，「門中」の編成原理が家筋中心から血筋中心へと変化しつつあるということだ [松園 1970: 10]。ここで取りあげた慶留間島の事例などは，さしあたり粟国島や座間味島の「門中」とかなり似ているといってよいだろう。

謝　辞

この報告は，1960年3月9日から26日にかけて，慶良間群島の阿嘉島と慶留間島で採録した資料の一部である。筆者をこころよく受けいれてくださった座間味村役場，両島の多くの方々に厚くお礼申しあげる。

文　　献

知念勉之助
1934「慶良間の山の神」『島』509-510。
比嘉　政夫
1969「八重山川平におけるお嶽をめぐる儀礼と祭祀組織」『民族学研究』34(1)：22-39。
河村　只雄
1942『続南方文化の探究』創元社。
小牧　実繁
1931「沖縄慶良間島の祭事」『民俗学』3(3)：178-179。
伊藤　幹治
1962「八重山群島における兄弟姉妹を中心とした親族関係」『民族学研究』27(1)：7-12。
1974a「祭団の構造と論理」『国学院大学日本文化研究所紀要』33：155-182。
1974b『稲作儀礼の研究』而立書房。
Itoh, Mikiharu
1974 Change and Stability in the Folk Religion of the Okinawan Society. *East Asian Cultural Studies*, XIII (1-4): 51-57.
馬淵　東一
1971「沖縄の穀物起原説話」谷川健一編『村落共同体』(『わが沖縄』4）木耳社，pp. 357-379.
松原　治郎
1972「沖縄調査の社会学的視点」『人類科学』24：175-197。
松園万亀雄
1970「沖縄座間味島の門中組織」『日本民俗学』71：1-28。
源　　武雄
1957「八重山古見地方における稲作とその信仰行事」琉球政府文化財保護委員会編『文化財要覧』，pp. 79-82.
宮城　栄昌
1954「沖縄国頭地方の農耕儀礼」『日本民俗学』2(1)：117-129。
宮本　演彦
1952「小浜島の穂祭り」『民間伝承』16(4)：7-11。
宮良　賢貞
1940「小浜島のニロー神」『南島』1：60-64。

宮良　高弘
1962「八重山群島におけるいわゆる秘密結社について」『民族学研究』27(1)：347-352。
1968「黒マタ・白マタ・赤マタの祭祀――西表島・古見部落の豊年祭――」『札幌大学紀要』1：85-103。
折口　信夫
1955『折口信夫全集』1，中央公論社。
大阪市立大学八重山群島学術調査隊編
1963『八重山群島学術調査報告』日地出版株式会社。
リーブラ，W. G.
1974『沖縄の宗教と社会構造』弘文堂　(Lebra, W. G., *Okinawan Religion*. University of Hawaii Press, 1966).
酒井　卯作
1956「沖縄八重山郡川平部落調査報告」『日本民俗学』3(4)：70-83。
真野　俊和
1967「八重山古見の豊年祭」『民俗学評論』1：42-51。
山路　勝彦
1967「沖縄渡名喜島の門中についての予備的報告」『日本民俗学会報』54：22-34。
1968「沖縄小離島村落における<門中>形成の動態」『民族学研究』33(1)：17-31。
柳田　国男
1963『定本柳田国男集』1，筑摩書房。